



熊

野町は、広島市から車でおよそ30分。筆づくりで有名である。人口はおおよそ2万5000。その1割の2500人ほどのひとたちが、なにかしら筆づくりの仕事に関わっているという。まさに筆の町である。

「もともとは、農地にめぐまれなかったので、奈良地方に出稼ぎに行っていたんですね、このあたりのひとたちは」
 そう解説してくれたのは、筆の里工房の袖山歩未さんだ。筆の里工房は筆をテーマにした博物館。

「江戸時代の終わりごろです。出稼ぎに行つて、帰りに筆や墨を仕入れて、諸国に売りさばいたわけです」

熊野の周辺で材料がとれたというこ

今月の自慢旅

2

広島県熊野町

Kumano, Hiroshima

とではないのである。そのうち、筆づくりそのものをやってみようという若者が現れた。

「有馬筆や奈良筆の技術を習得に行つたり、また、広島藩が職人を招いて、熊野の村人に習得させたんですね」

戦後は、書筆の需要が減っていくが、そこから書筆づくりの技術を生かした画筆や化粧筆へとシフトして、現在にいたるのである。

「日本国内の筆の生産量ということでは、熊野筆が全国1位です」

筆の材料は、ヤギやイタチ、リス。「毛の良し悪しを選別するのに20年かかります」

熊野筆伝統工芸士の湊弘さんの話。

「筆づくりには、細かくいうと73工程あるんですよ。73工程のひとつでも省いたら、もう、だめですから」

きちんとつくれば、穂先の寿命がくる前に毛が抜けることはあり得ない、と、湊さんは言いきる。

筆の里工房の1階に「ビストロシン」というレストランがある。

ランチがリーズナブルで、オススメだ。ディナーはひと組限定なのだそうだ。

「好き嫌いを聞いてから、つくりたいんです。何組も取つたら、心が痛んで痛んで……もつとできたのになあつて」

シェフの新田貴司さんは、そんなふうに言う。新田さんもまた、筆づくりと同じように手を抜けない職人のようだ。中学生の息子が土日、厨房を手伝っている。将来が楽しみなのである。

熊野町では、小学1年生から書道を習う。熊野高校には書道コースがある。書に触れ、日本の心に触れることができる、そんな町。筆づくりの技術で生きる——なんだか技術立国ニッポンを

思わせて、旅は奥深いのである。